

絆

題字：2024 -2025 生徒会企画部長 梶田 愛佳

京都外大西高等学校

Kyoto Gaidai Nishi
high school



学校
広報

2026年2月2日 発行

〒615-0074

京都市右京区山ノ内苗町37

【編集・発行】

TEL 075-321-0712

FAX 075-322-7733

後藤 純子 谷口 小麦

安藤 茉音 飯田 愛香

2025年度
第9号

「寄り添う」ことから始まる学び

2年 国際文化コース

コミュニティ福祉サービス活動報告

2年 ICA・ICB 組の生徒たちは、11月14日（金）に「コミュニティ福祉サービス（地域奉仕活動）」に参加しました。

本活動の実施に先立ち、一学期より複数回にわたる事前学習を積み重ねてまいりました。学習の過程では、現役の保健師や社会福祉士の方を講師にお招きし、専門的な知見から福祉に対する姿勢や心構えを詳しくうかがいました。また、各施設からのご依頼に基づき、グループごとに歌やゲーム、アクティビティの準備を整えて当日を迎えました。当日は8つのグループに分かれ、地域の各福祉施設を訪問するという大変貴重な機会をいただきました。

限られた時間ではありましたが、現場での交流を通じて、生徒たちは多くのことを感じ取りました。利用者の方々との触れ合いの中で、福祉の本質や社会的課題にまで考えを深めた、生徒たちの真摯な声をご紹介します。



「世代を超えて受け継がれる人生の重み」

朽網 瑠奈

私は今回、介護老人施設で体験学習を行いました。当初は「自分に何ができるのか」という不安でいっぱいでしたが、ある女性利用者の方への声かけをきっかけに、その不安は大きな学びに変わりました。「若い人と会うとパワーがもらえる」という言葉をいただき、自分の存在が誰かの活力になれる喜びを肌で感じる事ができたからです。

活動中、特に印象に残ったのは、教科書でしか知らなかった戦争体験や、懸命なりハビリのお話です。実体験に基づいた言葉の重みに触れ、平和の尊さや努力の大切さを改めて痛感しました。また、おやつ作りや合唱を通じて、身体的な不自由があっても明るく前向きに生きる方々の姿に接し、私の方が元気をいただく場面も多くありました。

一方で、家族に会えない寂しさを吐露する方の表情に胸を痛める場面もありました。この体験を通し、高齢者の方々がいかに他者との繋がりや寄り添いを必要としているかを深く理解しました。最初はマイナスな気持ちもありましたが、今は福祉へのイメージが大きく変わり、相手の心に寄り添うことの大切さを学べたこの機会に心から感謝しています。



「専門職の連携と 社会が抱える課題」

中澤 柚月

施設では、職員の方々が常に周囲に目を配り、笑顔で親しみやすく接しておられる姿が印象的でした。介護職、看護師、管理栄養士など、多様な専門職が職種の垣根を超えて連携し、強いチームプレーで利用者さんやご家族に寄り添う姿に感銘を受けました。

休憩時間に職員の方々が和やかに談笑される様子を拝見し、こうした良好な人間関係が、利用者さんの安心感や現場の明るい雰囲気、そして働く側の負担軽減に繋がっているのだと実感しました。また、24時間体制で安全を見守る夜勤の責任の重さを知り、介護の現場がどれほどの覚悟で支えられているかを改めて学びました。

さらに、職員の方のお話から社会的課題についても深く考えさせられました。入所希望者が定員の倍近くに達し、常に順番待ちの状態であるという現状をうかがい、急速な高齢化と担い手不足の深刻さを肌で感じました。この体験を通じて、介護を個人の問題としてだけでなく、社会全体でどのように支えていくべきか、真剣に考え続ける必要があると強く思いました。

「言葉以上のぬくもりを感じて」 橋本 樹

特に印象に残っているのは、ある女性の利用者の方との会話です。昔の暮らしやご家族のこと、好きな歌の話などを嬉しそうに話してくださる姿を見て、「自分の思い出を誰かに聞いてもらうこと」が、その方にとってどれほど大切でかけがえのない時間であるかを実感しました。私はただお話を聞くことしかできませんでした。が、「あなたと話せてよかった」という言葉をいただき、参加して本当に良かったと強く感じました。この活動を通して、高齢者の方々が求めている寄り添いの大切さと、それを支える介護という仕事の尊さを深く学ぶことができました。

「『してあげる』から『ともに過ごす』へ」

保田 栞里

今回の活動は、私にとって深く「人と向き合う」時間となりました。コミュニティ・サービスに参加する前は、「お手伝いをする」というイメージがあり、何らかの作業をこなす活動と捉えていましたが、利用者の方々と関わる中でその考えは大きく変わっていきました。

施設には、会話を楽しまれる方、静かに休まれている方、独り言を続けられている方など、様々な状態の方がいらっしゃいました。「高齢者」と一括りにするのではなく、お一人おひとりの歩んできた人生や、世界の見え方の違いを尊重することの大切さを実感しました。また、元気よく話しかけるよりも、相手と同じ目線に立ち、落ち着いた声で接する方が、相手の表情が和らぐことにも気づきました。



反応が少なく見えても、こちらの声に耳を傾けようとしてくださる姿勢に触れ、私自身も自然と笑顔で接することができました。相手のペースに合わせることは、想像以上に丁寧な心構えが必要でしたが、それは単なる「作業」ではなく「相手の時間に寄り添う経験」でした。こちらが何かをしてあげるだけでなく、相手から学ばせていただくことも多いのだと感じた、非常に貴重な体験となりました。